いるかよくわからないが，ともかく，評者がこのようなカテゴリヤに出會ったのは，本書がはじめてであることをかきそえておく。

もうひとつ書きそえておきたいのは，この章のなかで，經濟採算制の單位としてのグラフキ главки がかなり重要な役割を果していることが具體的にのべられていることである。この點をくわしくのべている餘裕はないが，本書の 69 ページから 74 ページへかけて，經濟採算制のなかでのグラフキと企業との關係がかなり具體的にのべられている點，評者には興味が深かった。

5

社會主義社會の純所得のもうひとつの構成部分でありまた現象形態でもあるのは取引税である。第3章における利潤の分析にひきつづく第4章は，取引税の分析にあてられている。この章でのわれわれの興味は，なぜ純所得の中央集中化のテコとして取引税と利潤控除とが使用されるかについての説明がなされる（116 ページ）[3] とともに取引税についてのかなり具體的な説明が與えられている點である。すなわち，取引税の支拂にたいして責任を負う機關，取引税の支拂期などの諸項目にひきつずいて，1930 年の税制改革によって從來の諸税が整理され，全部で約 70 あった諸税のうち，53 の税が取引税として再編成されるプロセスを具體的にのべているあたりは，興味深くよまれる。

最後に戰後の諸年の國家財政歳入における利潤控除と取引税の相互關係の推移と，これら中央集中化純所得の增大要因をのべ，ついで，右のソヴェート的經驗が人民民主主義諸國にも一般的に妥當することを指摘して本書はおわっている。

6

ここでこれまでの評價を再確認しつつ，本書の意義を要約してみよう。本書の特色は，第 1—2 章で，利潤（利潤控除）と取引税とを純所得の二つの要素，現象形態としてとらえ，それにつずく二つの章で，充分詳細に，この2つのカテゴリヤにたいする特殊・具體的な説明を與えている點である。その點，構成の上からはきわめてまとまりのいい書物である。分量からいっても手頃であるが，それだけに十二分に詳細とはいいがたい。ただ，この2つのカテゴリヤのおかれている setting をあきらかにし，今後よりたちいった細目研究にはいろうとする研究者にとって，出發點として利用されるのには充分に貴重な書物である。近年におけるソヴェート學界の新しい研究方向の一つの成果として，一讀に値いする。

（野々村一雄）

3) これはとりたてていうまでもないと思うが，取引税は各企業の計畫遂行度の如何にかかわらず國家財政歳入の安定性を確保するためであり，利潤控除は，計畫の遂行度の狀態によって規定される純所得(利潤)の現實量に卽して國家財政歳入を確保するためのものであり，兩者が相互補充的に機能することによって，社會主義經濟の純所得が中央集中されるのである。

ウィリアム・H・タウンゼンド

『リンカーンとブルーグラス』

——ケンタッキー州における奴隷制度と內戰——

Townsend, William H., *Lincoln and the Bluegrass —— Slavery and Civil War in Kentucky.* University of Kentucky Press, 1955. pp. xiv+392.

1

表題中の the Bluegrass とは，bluegrass がたくさん生えているといわれる，いわゆる Bluegrass Region のことである[1]。だいたい Kentucky 州の中部地方を指す。南北戰爭以前この地方は，長いあいだ Kentucky 州における奴隷制度繁榮の心臟部であった。Lexington は，そこでの政治・經濟・文化の中心地で，「西部のアテネ」"Athens of the West" とよばれた。のちに Lincoln の妻となった Mary Ann Todd は，この地の名門の出で自らも著名な一政治家であった Robert S. Todd の娘として，そこに生れそこで大きくなった。

北部ブルジョアジーの南部奴隷所有者階級にたいする妥協のはじまりといわれる 1820 年の Missouri 協定の境界線（北緯 36 度 30 分）沿いの北方に位置し，內戰にさいしては北部と南部の境界地域にあたる border states (Del., Md., Va., Ky., Tenn., Ark., の諸州）のひとつとして微妙な立場をとった Kentucky 州——その Kentucky 州の奴隷制度には，Deep South のそれとは異った patriarchal な一面があったといわれているが，しかしそれとても，野蠻・殘忍・無智・隷從などの言葉で示される，この制度に本來的に固有な非人間的な一般

1) すずめのかたびら屬。芝に似た草で，Kentucky 州から Tennessee 州にかけて多く繁茂する。とくに牧草として秀れている。そこから，Kentucky bluegrass, Meadowgrass, Spearglass ともよばれる。また，Kentucky 州のことを the state of bluegrass ともいう。

的屬性と本質とを否定するものでは毛頭なかった。奴隷賣買の廣告文[2]，奴隷小屋，奴隷用の牢獄や刑罰場など——"peculiar institution"とよばれたこの制度のなまなましい諸様相が Lexington の町のいたるところでみうけられた。當時この町を訪れたひとりの旅行者は，刑罰場からもれてくる鞭打たれる奴隷たちのうめき聲を「ケンタッキーの自由の弔鐘」と聞いた。そして月の第2月曜日にひらかれる court day[3] には，きまって賑やかな奴隷のせり市が町の裁判所前の廣場にたった。

Lincoln が生れた（1809 年 2 月 12 日）のは，ほかならぬこの Kentucky 州で，Lexington のある Fayette 郡からはそれ程遠くない Hardin 郡であったが，しかし，周知のように，かれは幼少の頃家族とともに北方 Indiana 州へ移り，さらに Illnois 州に移って以後二度と南部の土地に住むことはなかった。だから，南北戰爭史ならびに Lincoln の著名な研究者である J. G. Randall が，「すべてのことを考慮にいれて，けっきよく，ケンタッキー州は，かれが最初に呱々の聲をあげてから成人して公事にたずさわるようになるまで，リンカーンの一部であった[4]——」といっても，その Kentucky 州すなわち Lincoln の一部としてつねにかれのなかに存在していた「南部人」は，生來的なものであると同時に，より多くかれの妻の環境をとおして作用していたともいえるのである。本書の著者 Townsend は，「ブルーグラス地方が，リンカーンが身近かに知っていた，唯一の奴隷所有の南部である」といっている。

Mary Ann Todd は生粹の Lexington 婦人でしかも上流家庭で育った。さきにも少しふれたように，彼女の父 Robert は當時 Kentucky 州の著名な政治家で，州の上院議員をはじめ多くの要職を兼ね，この州のホイッグ黨の指導者のひとりであった。その家は，よくホイッグ黨の指導者たちのたまりばにもなった。幼少の頃から，彼女は，自分の家の爐端やテーブルのまわりで，ジューレップを飲みながら談笑するかれらをみかけることがしばしばあった。そのなかには Robertson, Combs, Buckner, …そして Crittenden や Clay の顔もみられた。また，のちの合衆國副大統領そして 1860 年のあの歴史的な大統領選擧戰では，自分の夫の政敵としてたちあらわれることになった John C. Breckinridge は彼女の幼友達であり，おなじくのちに南部連邦の大統領になった Jefferson Davis は彼女の家からほど遠からぬところに住んでいた。このような環境を全身に背負って，Mary は 1840 年のはじめ頃「邊境の立法府議員」——Lincoln に近づき，かれと婚約し，そしてひともんちゃくあっていったん婚約を破棄したのち，再びもとに戻って 1842 年 11 月 4 日にとうとう結婚した。終生 Lincoln が偶像視さえしていた妥協の政治家 Henry Clay や，その親戚で Kentucky 州における奴隷制反對紙 *The True American* を發行し，のちには Lincoln の大統領候補指名にさいして大きな役割を果した Cassius M. Clay，また言葉の上では Lincoln の奴隷解放に贊成しつつも奴隷という財産權の擁護をあくまでも强調した George Robertson などの人々と Lincoln が交るようになったのも，直接的には Mary をとおしてであった。

2

おなじ著者によって 25 年も前にかかれた *Lincoln and His Wife's Home Town* と題する書物の發展として，その後に得られた新資料を十分に加味して出來あがったといわれる本書は，その表題が示すとおり，以上みてきたような妻 Mary の環境——一言でいえば Bluegrass が，Lincoln の人間形成，なかんずく，かれの奴隷制についての世界觀の形成過程で，どのような役割を果したかを歴史的に究明しようと企圖しているようである。そのために，著者は，Lexington の町とともに古い Todd 家の系譜——事實，1775 年 6 月に最初の探檢隊がこの地に植民し，あの Lexington-Concord にちなんで，ここにその名がつけたとき，Robert の父 Levi もまたその探檢隊員のひとりであった——から筆をおこし，Todd 家をとりまくもろもろの環境，Bluegrass を中心とする

---

2) そのなかには，次のような殘忍きわまるものもある。

プタンターならびに奴隷所有者に
インド痘（黑人特有の傳染病）・ルイレキ・慢性下痢・リウマチ・肺病などにより，勞働不向きとなった奴隷を所有し，適當條件で處分希望の方は，ニュー・オルリーンズ，キャンプスト街29 番地の J. キングまで御連絡ありたし。

これは病氣のために普通の勞働にも耐えられなくなった奴隷たちを，1 人あたり數ドルそこそこの安値で Kentucky 州その他の境界諸州で買いとり，死ぬことを豫め承知のうえで河下のプランテーションに連れて行き，そこで死ぬまでの束の間の勞働力を最大限に酷使しようとしていたことを示すものである。

3) Bluegrass における古くからの慣習で，月の第2月曜日に開かれるこの裁判の日に，Lexington の近郷の人々が買物や遊びをかねて1日仕事をやめて出かけて來る，いわば一種の安息日でもある。奴隷のせり市はこの人出のなかで，裁判所前の廣場で行われる。なお，Lexington の奴隷のせり市はこの日のほかに土曜日にもたつ。

4) J. F. Randall, *Lincoln, The President*, Vol. 1, p. 6

奴隷州 Kentucky の諸相様，そこで活躍する多くの政治家たちの人間像を豐富な資料にもとづいて詳しく，しかもいきいきと展開する。その描寫はきわめて寫實的で，讀みながら私じしん，ときとして小說をよんでいるかのような錯角に陷ることさえあったが，堅固な資料的な裏づけが飽くまでもこの書物を，すぐれて學問的な歷史書たらしめている。そこに描かれている多くの出來ごと，例えば 1847 年秋，メキシコ戰爭のさなかに國會議員として第 30 議會に出席のため Washington に向う Lincolin が，途中族家とともに Lexington に滯在したときの有様，またさきにもふれた *The True American* の發刊をめぐる劇的な經緯や Cassius M. Clay の多彩なひととなり，Robert S. Todd の死後もちあがり Lincoln じしんそれにまきこまれることにもなった Robert の Wickliffe に對する訴訟事件等々そのどのひとつについても，ここで具體的に紹介する紙數はないが，いずれも Kentucky 州の奴隷制度と密接に結びついており，直接的に間接的になんらかのかたちで，Lincoln の奴隷制についての世界觀の形成に影響をあたえていると思われるものばかりである。

しかし，私は，400 頁にものぼる本書をようやく讀み終った今，私がさきに推定した著者の企圖が果してどの程度まで本書のなかで成功しているかを思うとき，かなり否定的に答えざるをえない。つまり，それが成功するためには Lincoln の奴隷制についての世界觀の形成と Mary を媒介としてかれの生活のなかにはいってきた Bluegrass との結びつきが，現象面での對比からさらに深くたちいって，內的かつ有機的な關連において，理論的にももっとほりさげられなければならないと思うからである。けっきょく，私は，私が最後まで期待していたひとつの問題——敢てその一點だけでとはいわないけれど，Lincoln がまさにそのことによって，たんにアメリカの偉人であるばかりでなく，ひろく世界の民主主義者となることができたあの奴隷解放宣言をかれにださせた基底的な諸力がいったい何であったのかを本書によって敎えられることはきわめて少なかったのあでる。この私の期待は，或は本書の著者が企圖したところのものとは直接的な關係がないかもしれない。しかし，解放宣言こそはあきらかに Lincoln の世界觀の輝しい頂點であり，その具體化であってみれば，そこにくるまでの Lincoln の世界觀の形成過程が，今述べたような角度から，もっと深くほりさげられていれば，この私の期待ももう少し滿足させられたにちがいない。これだけ尨大な資料を提供してくれていながら，それらが，極言すれば，たんにきらびやかな資料の展示におわっているとの感じを受けるのは，私が慾張りすぎているためであろうか。もちろん，複雜多岐な Lincoln の世界觀を，たとえその奴隷制に關する側面にだけに限るとしても，本書のなかで著者がとりあげた視角だけからの照射によって十全に解明しようと思うのは，はじめからそう考えるほうが無理である。そのことは著者じしんも十分に承知のことと思う。それにしても，著者がとりあげたその視角內においてだけでも，さらにつっこんだ理論化が望まれる。

著者じしん，このことを識ってか識らずか，本書には，「ケンタッキー州における奴隷制と內戰」という副題がそえられている。Lincoln との關連ということは，つねに著者の頭のなかを貫いていたであろうし，そのような著者の企圖は本書の隨所にみうけられるが，しかし本書によってより多く敎えられるものは，Lincoln と Bluegrass との有機的な關連ということよりは，むしろ Kentucky 州における奴隷制と內戰についての實情である。そのような意味において，本書の價値の多くはすぐれてその文獻的な部分にあるということができる。

（本田創造）

H. F. リダル

『イギリス人の所得と貯蓄』

H. F. Lydall, *British Incomes and Savings*, Basil Blackwell, Oxford, 1955, XV+274pp.

1

ここに紹介する著書は，オックスフォード大學統計研究所の研究叢書の中の 1 册であって，著者がここ數年來同研究所のブレティンに發表してきた論文を集大成し，更に新たな研究を附加したものである。著者の Lydall については，その詳しい研究歷は判らないが，現在統計研究所の調査擔當者として，專ら地味な研究に從事している人である。

1952 年にオックスフォード大學統計研究所は，Survey Research Center of Michigan University の協力をえて，イギリスにおける個人所得と個人貯蓄に關する最初の全國的サンプル調査を行った (the Survey of Personal Incomes and Savings)。この調査は全國のあらゆる階級の人々を網羅したものとして 2,600 の有效サンプルをとっている。そしてこの調査結果を種々の角度から分析したのが本書の全貌である。

Rowntree の York における調査を嚆矢として多くの研究が家計について行われてきた。しかし何れの研究